

鎌倉市立第二小学校との交流

—— 修学旅行の改善に取りくむ ——

足利市立三重小学校

1 はじめに

どこの学校でも、児童たちにいちばん好かれる楽しい行事は、遠足、修学旅行的行事であろう。児童たちは、遠足や修学旅行の中で、日常の学校生活では味わうことのできない変化に富んだ体験をして楽しい思い出に浸っているように思う。しかしながら教師サイドでは、いわば慣例的、惰性的に行われ、児童たちの創意が十分生かされないまま実施している場合が少なくないと思われる。

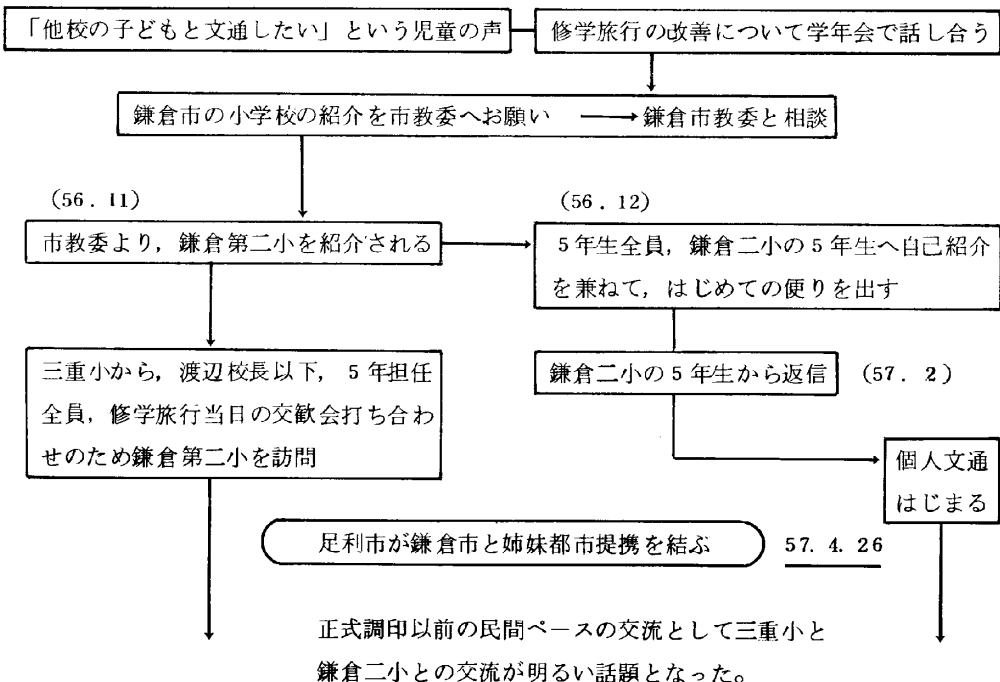
そこで、本校では、学校教育目標の具現化のために、修学旅行の目標を明確にすることが大切だと話し合われ、特に、児童の積極的参加を促し、感動、感銘の得られる修学旅行、わたしたちの町ぼくたちの学校という所属意識が目覚めるような修学旅行、教科学習の発展が見られるような修学旅行をめざして改善に取りくんでみた。今回の修学旅行改善の中で大きな意義をもつものは、「鎌倉市立第二小学校との交流」であった。この交流体験が、児童たちにどんな変容をもたらしたか。修学旅行改善の観点から、その実践の一端を紹介する。

2 鎌倉市立第二小学校との交流

(1) 交流の経過

(56. 10)

(56. 10)



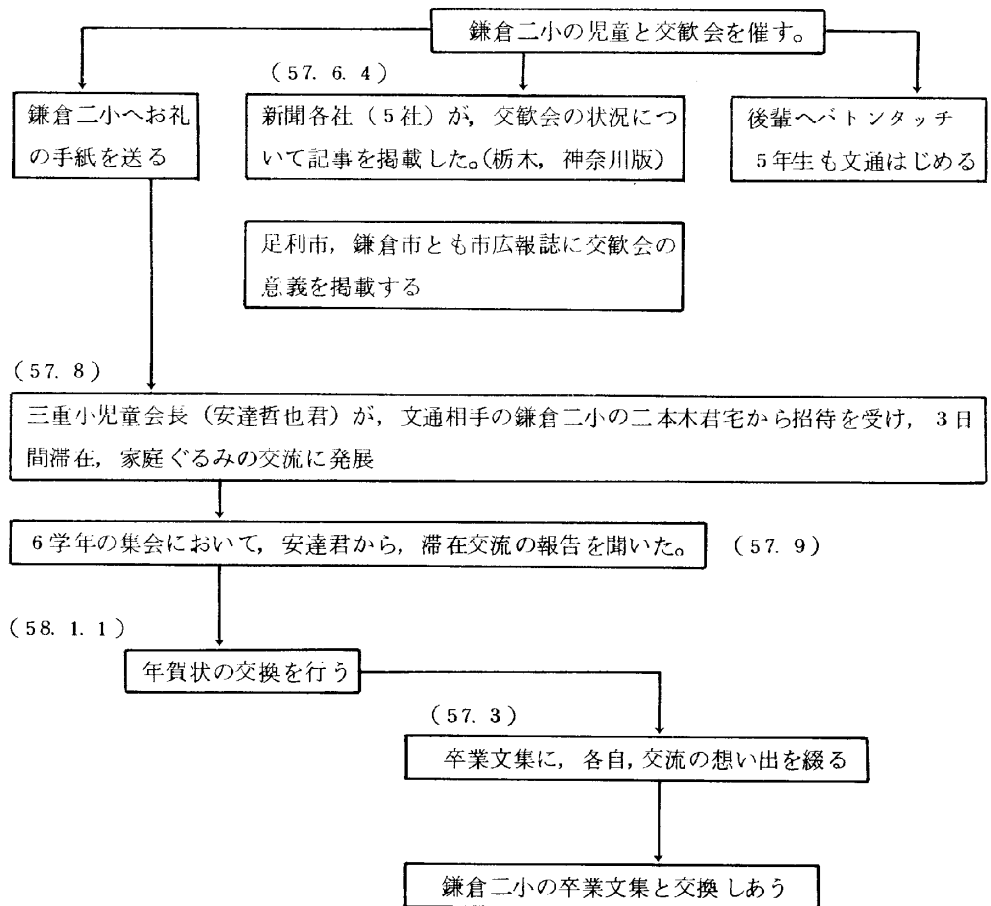
(57. 4~5)

本校 6 年生全員，社会科学習の発展として「郷土の紹介」を考え，鎌倉市と足利市との歴史的つながりについて調べる学習はじまる。小冊子「鎌倉」としてまとめ，鎌倉二小へ送る。

図工学習の発展として，手づくりの文鎮（動物の体をかたどった素焼きの文鎮）を製作，鎌倉二小との交歓会当日のおみやげにした。

音楽学習の発展として「鎌倉」の歌を猛練習，交歓会の席上，両校児童で大合唱した。

修学旅行の当日（第 1 日目，57. 6. 3）



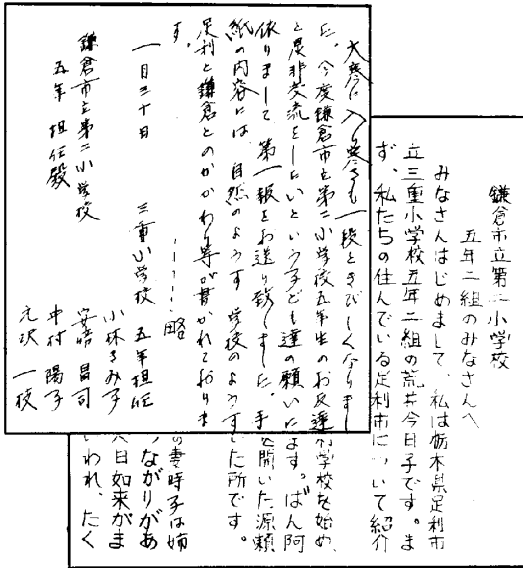
(57. 3)

三重小卒業式
学校長式辞に，鎌倉二小との交歓会シーンを音で再現する。卒業生一同思い出に涙す

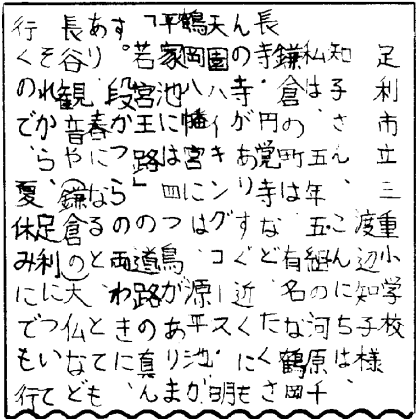
(2) 交流の状況

① 修学旅行前の交流状況

ア. 鎌倉の友だちに第一回目の便りを送る。



一回目の手紙は、クラスごとにまとめて鎌倉第二小に送られた。その後、鎌倉第二小で、一人ひとりの文通相手が決められ、返信された。左の手紙は、まだ見ぬ文通相手に思いをこめ、自己紹介の中に、郷土足利の歴史の紹介や、源氏と足利市のつながりを書いた児童の手紙と、その時の担任がおくった交流についてのお願いの手紙である。



イ. 鎌倉第二小から各自に右のような返信が届く。

鎌倉第二小で文通相手を決め、まとめて、手紙の返事が届いた。どんな文通相手なのか楽しみであり、不安な気持ちも入り混じった複雑な気持ちで封を切っていた。この手紙は、鎌倉第二小の友達からきた手紙の一部で、自己紹介、学校生活のことや、鎌倉の歴史のことなどが書かれていた。三重小児童の話題は、文通相手とその内容でもちきりだった。以後、個人単位の文通が盛んに行われた。

ウ. 事前打ち合わせ

児童の文通状況を考え、交歓会をさらに有益にするために、担任が鎌倉第二小を訪れた。
・材木座海岸で会うこと・鎌倉第二小児童の案内で八幡宮を訪れることなど、鎌倉第二小の温かいご配慮、思いやりが大変ありがたかった。交歓会当日が早くも楽しみになる。

エ. 修学旅行指導計画

- ・第1日 東京国際空港→材木座海岸 11時40分 昼食を共に交歓会
12時40分 徒歩にて八幡宮を案内される
→八幡宮→大仏→久里浜港〜金谷港→旅館
- ・第2日 竜島海岸(地曳網)→旅館→君津製鉄所→木更津海岸(昼食)→京葉工業地域

オ. 修学旅行事前指導

(ア) 社会科の発展として、小冊子「鎌倉」を作った。

目次	
	はじめの言葉 ----- 1
1	足利と鎌倉のつながり ----- 3
2	鎌倉幕府 ----- 6
3	鎌倉幕府を聞くために活躍した人々 ----- 10
4	鎌倉時代の主な出来事 ----- 14
5	鎌倉時代の文化 ----- 18
6	史跡 (鎌倉の歌から) ----- 24
7	現在の鎌倉市と友達からの手紙 ----- 34
	おわりの言葉 ----- 40

鎌倉のことを勉強して……

今まで気にも止めなかった鎌倉でしたが、よく分かりとてもよかったです。資料となった物は、学習事典、資料集、鎌倉第二小の友達からの手紙です。手紙には、くわしく書いてあり、とても助かりました。文通できてよかったです。

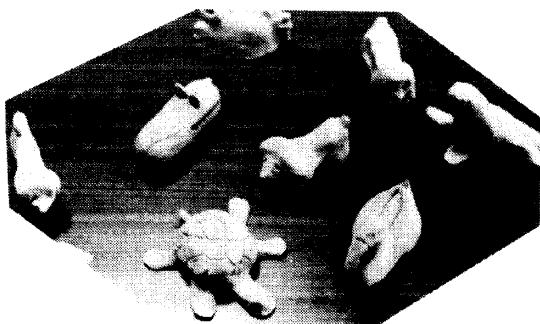
(あとがきから)

足利や鎌倉の歴史や文化のつながりを学ぶ上に文通のはたす役割は、大きかった。また、文通により友情が深まる中で姉妹都市になったことも、この小冊子を作る励みとなり、児童の学習活動も生き生きとしていた。まさに、教科学習の発展として修学旅行が準備されていった。



編集委員を中心に6年生全児童が参加して作った小冊子

(イ) 図工の発展として、プレゼント(素焼きの文鎮)を作成した。



「この文鎮、喜んでくれるかなあ。」
 「気にいってくれるといいなあ。」
 「大事に使ってくれるかなあ。」
 「早くあいたいなあ。」
 ……と思いめぐらしながら、ていねいに文鎮を作りあげていた。

(ウ) 音楽の発展として、歴史のある町を唱った歌「鎌倉」の練習をした。

この歌は、当日交歓会で歌うことになっていた。歌いながらも、文通相手のことや、鎌倉の町の様子を思い浮かべ、すでに、心は交歓会へと通じていた。

② 修学旅行当日の交流状況

(57年6月3日(木) 11:40~2:00)

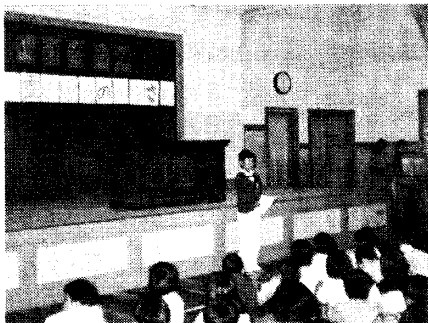
ア. 交歓会のプログラム

1. 両校の校長先生あいさつ
2. 両校の児童代表あいさつ
3. みんなで歌おう
「鎌倉」 「手の平を太陽に」
4. 昼食(手紙を交換したクラスどうし)
5. いっしょに遊ぶ
6. 記念撮影
7. お別れの言葉

海のない町の児童のためにと、交歓会は、材木座海岸が予定されていたが、あいにくの雨で、第二小の講堂に変更された。

鎌倉第二小の先生や児童たちの拍手に迎えられる「ようこそ、三重小学校のみなさん」と大きく書かれた講堂へ入った。初めて会った文通相手と握手、「この感触は忘れられない！」と感激、この感動が6年児童のその後の学校生活を変えていった。

イ. 交歓会の様子



(ア) 両校児童代表のあいさつから

第二小の東海林圭一郎君が、「みなさんに会えるのをとても楽しみにしていました。鎌倉と足利が姉妹都市になりましたが、お互いの学校の修学旅行の行き先が鎌倉と日光なのは、面白いことです。」と歓迎のあいさつ。三重小の安達哲也君が「初めて手紙が届いたときは、飛び上がって喜びました。文通でこれからも友情を深めましょう。」と元気にあいさつをかわし合った。両校の子どもたちに心の輪が広がるハイライトだった。

(イ) みんなで歌おう

「鎌倉」「手の平を太陽に」の2曲を合唱した。特に「鎌倉」の歌は、1か月前から朝の会や帰りの会に自主的に毎日練習していた。

「鎌倉」の歌は、第二小の体育館にひびきわたりました。外は、雨だというのに、声は、晴ればれと聞こえました。僕は、この『鎌倉』の歌をいつまでもいつまでも忘れずに覚えていようと思いました。

—— 児童の日記より ——



(ウ) 昼食

手紙を交換していたクラスごとになわかれで昼食をとった。児童たちは、はじめから緊張気味だったが、胸につけた名札でお互いのペンフレンドを見つけ「ぼくです。よろしくね。」などと握手をかわし合った。児童ひとりひとりが文通している友達に粘土で作った手作りの文鎮をプレゼントしたり、お弁当を広げ食べ物を交換したりして、学校や町のことなどを話し合い、友情を深め合った。



『昼食も仲良く食べて、私は、おくり物をやりました。何もかえってきませんでした。でも、河原さんの心が、友情が、かえってきました。何よりもうれしいプレゼントでした。にぎり合ったあの手の中に、温かいものがあり、私の手に伝わってきました。』
(児童の日記より)

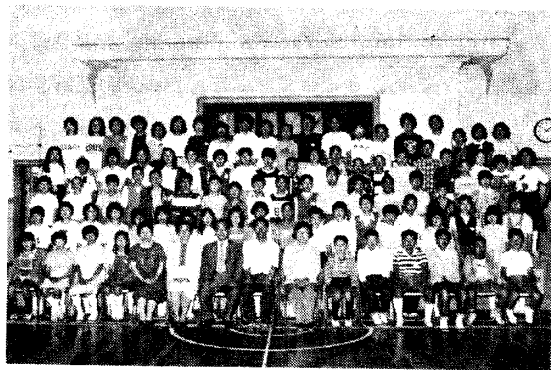
(エ) いっしょ遊ぶ

昼食後、文通相手と、フォークダンスやゲームをしたり、お互いに写真をとり合ったりして楽しく過した。

(オ) 記念撮影

鎌倉第二小の友達を交えて、クラスごとに記念撮影をした。

この写真は、各クラスに掲示し、卒業するまで思いをはせていた。



(カ) お別れ

記念撮影後、名残惜し気に三重小児童は、次の予定地へ向った。今後も文通を続け、友情のきずなを太くしていくことにしている。

『楽しかった交歓会は、あっという間に終わってしまいました。手紙だけしか出せなかったのが、今日のたった2時間だけでこんなに楽しい友達ができてうれしいです。でも、最後に体育館を出るとき、とてもさみしかったです。バスに乗ってもその事を考えていました。これからも文通していこうと思っています。』

(児童の日記より)

③ 修学旅行後の交流状況

ア. 児童がとらえた修学旅行


・A君の体験

A君は、二本木君と文通しているうちに、ぜひもう一度、二本木君に会いたいと思うようになり、夏休みを利用して鎌倉へいくことになった。電話で連絡しているうちに、家族同志のおつき合いに発展したようである。2泊3日の鎌倉での生活は、A君にとって大変有意義であった。9月の学年集会の報告の中で、「僕がこうして鎌倉に行けたのも、二本木君の家族と二小の反達がやさしくもてなしてくださったからです。深く感謝すると同時に、今後、二小のみなさんが足利を訪ねてきたら温かくむかえてあげようと思っています。文通を通して互いの文化を知り、友情の輪を広げていくのはすばらしいことだと思います。」と話した。

・K君の卒業文集より

6年最後の卒業文集には、修学旅行の思い出が数多くのせられていた。その中には、文通を通して、友情を深め、交歓会で、はじめて会った友への思いを綴っている児童が多かった。

思いは、ぼやなく
もう、小学校で味えない修学旅行。もう、
思い出ない、鎌倉の女の子。今から見れば、速
い思い出にたないない。第二小に着いた時の
あの緊張感。女の子に会合、天時の緊張感。
文通も七回した。その中には、ぼくの思い出
が、あふれぬほど書きまわっている。時たま
、女の子の姿を何をしていっているのかなど思
たことも少しはぼや、た。やがてみな中学へ
行き、自分の道へ歩んで行くだろう。また、
自分が、いろいろな困難に会合、でも決して
負けはしない。それは心の奥深く永遠に思い
が消えないのだから。



イ. 父母がとらえた修学旅行

「あいにくの天気ですが、高橋イク子
乗れず、地引き網も出来なかった
事は残念だけど、文通相手に会
たので、本当に良かった。」と日
記に記してありました。
古都の歴史探訪も有意義で、楽
しい事ですが、型通りの修学旅行
とは一味違った楽しい旅行だった
ようです。
じかに触れた友達の手、ぬくも
り、弾んだ胸、その時の感激は深
まき、思い出として、心に残ると思
います。

ウ. 教師がとらえた修学旅行

鎌倉第二小との交流をし、子供達のふれ
合いを通して鎌倉の生きた学習資料づくり
が得られた。また、鎌倉の反達が足利の自
然や文化を知らせることによって自分達の
住んでいる郷土を見直すこともできたよう
に思われた。フラッシュを浴びながら和気
あいの交歓会があつという間に過ぎ、
最後の握手のぬくもりは、ずっと前からの
反達のように生涯忘れる事がないだろう。

エ. 地域の人々がとらえた修学旅行

鎌倉第二小との交歓会の翌日には、朝日・毎日・下野新聞などに、交歓会の様子が掲載された。また、広報誌「あしかがみ」「かまくらっ子」にも、姉妹都市に関連して、理解と親善に役立っている様子が紹介された。

3 交流の趣旨とその成果

(1) 修学旅行の改善に取りくんだわけ

遠足、修学旅行的行事は、他の教育活動に見られない貴重な教育的価値をもっているが、その教育的価値の吟味や反省のないまま惰性的、慣例的に実施して、いわゆるマンネリ化、形骸化している場合が少なくない。本校も例外ではなく、そうした傾向が見られた。ある日、「他校の子どもと文通したい」という児童の会話に耳を傾けた担任教師の思いが、マンネリ化しつつあった修学旅行の改善に取りくませた。同時に、5年職員の学年会の席で、体験学習を重視した宿泊学習をしようという話題が出された。そして、那須甲子少年自然の家を利用して、「スキー体験を生かした集団宿泊学習」が計画され、実施された。6年時の修学旅行においても体験学習重視の考えが取り入れられ、「他校と交流したい」という児童の発想が生かされていった。

(2) 修学旅行改善の観点

本校が取りくんだ修学旅行改善の観点は、次の5項目に整理されるが、この5つの観点を包含し得る活動として「鎌倉二小との交流」を計画し、実施したのである。

修学旅行改善の観点

- ① 児童の創意工夫を生かして、児童に積極的参加を促す修学旅行
- ② 感動、感銘が得られるような修学旅行
- ③ 学校、学年、学級の一員としての所属感、一体感が目覚めるような修学旅行
- ④ 教科学習の発展として取りくめるような修学旅行
- ⑤ 地域の特性を生かして、生活圏（視野）の広がりが図られる修学旅行

(3) 交流相手校として鎌倉第二小学校を選んだわけ

本校では、修学旅行の目的地として鎌倉市を選んでいる。その意味で、交流相手校としては、鎌倉市内の小学校を選定した。学校の具体的選定、紹介については、市教委学校教育課にお願いした。学校規模が同程度であること、見学先の鶴ヶ岡八幡宮に近いなどの関係で、鎌倉市立第二小学校が交流相手校に決まった。鎌倉第二小の先生方をはじめ、児童のみなさんが心よくお引き受けくださったことに感謝している。

期せずして、57年4月26日には、足利市と鎌倉市とが姉妹都市提携を結び、市民が互いに理解と親善を深めながら、両市の発展を図ることになった。その意味からも、本校児童と鎌倉二小児童との交流活動が両市における交流事業の一つの具体化になればとも合わせ考えた。

(4) 交流を取り入れた修学旅行の成果

① 児童の積極的参加と交流体験

学校行事は、ややもすると、その活動の過程よりも、その結果を重視しがちであるが、交流体験を取り入れた本校の修学旅行は、修学旅行当日はもとより、事前、事後における交流過程にこそ、大きな意義、成果が認められた。

児童たちにとって、自ら主体的に取りくむことができた「手づくりの修学旅行」であった。文通、一つをとっても、いちいち教師の指示を受けたり、頼ったりするわけにはいかない。自分の能力で、自分のすべてをあげて綴らなければならない。作文の嫌いな児童も自ら綴っていたのである。自らの能力、個性を生かしての交流活動であった。こうした体験が、一人ひとりの児童をいろいろな意味で変容させたと思われる。

教師は、個々の児童が、どう交流を深めているか、その質はどうかを把握しなければならない。本校では、各担任が「日記指導」を通して文通状況を把握し、賞賛や激励を与えながら、児童の交流を盛り上げていった。児童たちも、教師の期待に応じて、「交流状況」に述べられているような意欲的な活動がなされていった。まさに、交流を基盤に据えた「子どもサイドの修学旅行、手づくりの修学旅行」であったといえる。当日行われた交歓会は、修学旅行のハイライトであり、手づくりの修学旅行の達成感で満ちていた。

② 教科学習に発展がみられた

学習成果の総合的発展は、学校行事における基本的な目標の一つである。鎌倉二小との交流は、まず、社会科における歴史学習の発展として「郷土の紹介」からはじまった。鎌倉市と足利市との歴史的な関連を調べる学習活動を促し、その成果は、小冊子「鎌倉」としてまとめられ、修学旅行当日、鎌倉二小へ届けた。

また、図工学習の発展として、手づくりの焼き物（動物の体をかたどった文鎮）を、交歓会当日のおみやげとして6年生全員が製作した。初対面する鎌倉の友に思いをめぐらせながら製作した文鎮は、今日も、鎌倉の友の机の上に置かれ使用されていると聞いている。このように、教科学習の発展としての学習を交流活動に求め、教室での学習を深め、充実させることにつながったことは、大きな成果だった。

③ 感動、感激を残した修学旅行

「交流状況」にも述べられているように、今回の修学旅行には、従来みられなかった多くの感動場面が設定されていた。まだ見ぬ文通相手に思いをめぐらしながら綴った便り、初対面の友へのおみやげづくり、交歓会で初対面した時の感動、握手のぬくもり、体育館で共に歌った歌、踊って、語り合っただけで友情を深めたあの場面……等々、その時・時の感激は、深く心に残ると思われる。こうした感動体験が児童の既成のものの見方、考え方を根底から作りかえ、今後の学校生活をより明るく、より創造的に過す一つの契機になることを期待してやまない。

④ 生活圏（視野）の広がりがみられた。

鎌倉二小との交流は、ともすると閉鎖的になりがちな地方の子どもたちの視野を広げ、社会に対する理解を深めながら、他県、他地域の児童たちとの信頼関係、協調関係を深めることに役立った。

生活を知らせ合う文通の中で、自分を反省しながら、相手を思いやり、仲よくありたいと願

う気持ちは、同和教育の視点から考えても意義あることである。また、郷土を紹介し合う文通の中で、互いに自分たちの地域を深く学習し、誇り得る郷土を発見していく姿は、単なる教科書中心の学習では得られない成果かも知れない。本校がめざす「地域に根ざす教育」（一人ひとりの児童がふるさとを誇りに思い尽くそうとする態度）の実践の上からも貴重な体験となった。また、別の例では、修学旅行当日の交歓会が縁となり、子どもたちの心に友情が芽生え、児童会長だった安達君は、鎌倉二小の友の家庭から招待を受け、3日間寝食を共にしながら、家庭ぐるみのふれ合いを体験することができた。発達段階を考えると生活圏の拡大化といっても問題点はなくはないが、生涯に楽しい思い出を残すとともに、他地域の児童との信頼関係を深め、さらには、社会生活に必要な基本的な行動様式などの修得を考えるとプラスの面も大きいといえる。まさに、鎌倉二小との交流は、両校の子どもに心の輪が生まれ、一つの「地域」を越えた社会的連帯感を育てた機会にもなったといえる。

4 おわりに

新指導要領の趣旨を生かすべく、修学旅行の改善に取りくんだ実践の一端を紹介しましたが、まだまだ改善すべき点は山積しています。修学旅行の改善は古くて新しい課題であろうと思います。本校が取りくんだとはいえ、まだまだ未開拓の域を脱し得ませんが、この分野の成果には、大いに期待されるものがあります。このことが発見、確認できただけでも改善に取りくんだ意義がありました。幸いにして鎌倉第二小学校の戸口校長先生をはじめ、諸先生並びに児童のみなさんが心よく本校の意図するところをご理解くださり、ご協力いただいたことに対して深く感謝しております。これを契機に両校がますますお互いの理解と親善を深めながら、共に発展を図っていきたいと思います。同時に、鎌倉第二小学校のご紹介をはじめ交流について便宜をはかり、ご指導くださった足利、鎌倉両市の教育委員会に対し、厚くお礼申し上げます。

これからも、修学旅行のみならず、その他の学校行事についても、特別活動の意義を考え、それぞれの行事がどのように改善されなければならないか反省と検討を重ね、児童の創意工夫を生かしながら、参加の喜びをもたせ、より充実した実りある学校行事を創造していきたいと思います。

執筆者

教務主任	長竹 公二
6年1組担任	安倍 昌司
(学年主任) 2組担任	小林きみ子
3組担任	島田 幸子
4組担任	元沢 一枝

評

学校行事の目標は、学校生活に秩序と変化を与える集団活動によって、児童の心身の健全な発達を図り、併せて学校生活の充実と発展に資することです。ともすれば単調になりがちな学校生活に、望ましい秩序と変化を与える学校行事を適切に計画し実施することにより、児童の学校生活はより生き生きとした豊かなものになるはずです。

この実践研究も、その一貫としてとらえることができます。ここでは、まず第1に、修学旅行改善の観点を明確にしたことがあげられます。特に、児童の積極的参加と交流体験をベースに、感動・感銘が得られるよう修学旅行当日はもちろん、事前、事後にも交流の機会を持つなど、より主体的な学習参加の実践を示してくれたことは、今後の方向を考えるうえで時宜を得たものであります。

したがって、この研究が今後とも実践をとおしながら、より一層改善、充実されるよう期待しております。